

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

その「瞬間」を伝えたい

現場を奔走するカンスポ編集局員

◎社会学部 3年次生
宮西 美紅 さん

創刊60周年を迎えた『関大スポーツ(カンスポ)』。その編集局には各競技を紹介するため奔走する編集局員がいる。アイススケートを担当し、2018年2月の第23回オリンピック冬季競技大会(平昌五輪)に出場した宮原知子選手(文学部3年次生)を取材した宮西美紅さんも、真剣勝負だからこそ生まれるその「瞬間」を、追い求めている。

宮西 美紅—みやにし みく

■1997年、大阪府生まれ。大阪府立八尾高等学校卒。体育会本部関大スポーツ編集局所属。担当はアイススケート、器械体操、柔道、バスケットボール男子。特技はフィギュアスケートのジャンプの見分け。



●報道陣とともに取材に臨む宮西さん



満開の桜が咲き誇る千里山キャンパス。竣工直後の新しい匂いに包まれた東体育館の一室で、宮西さんは「取材されるのは初めてです。よろしくお願ひします」と緊張した表情を見せた。体育会「KAISERS」の活躍を報じる学生広報機関であるカンスポ編集局員として、主に年6回発行のカンスポと号外の紙面を彩る試合や選手を取材している。試合直後にTwitterで速報をアップし、2日以内にWEB記事を掲載。他の局員同様、宮西さんも複数の競技を担当しているが、特にフィギュアスケートの宮原選手の取材が多いという。

5歳から17歳までクラシック・バレエを習っていた宮西さんは、表現力など共通点の多いフィギュアスケートへの造詣も深い。国内の大会はほぼすべて取材に向かい、競技後の取材エリアでは一般紙、スポーツ紙をはじめ30人以上の報道陣とともに宮原選手を取り囲む。表情を読み取り、コメントの一言一句逃すまいと集中する。「何度か取材しているうちに、インタビューの位置や質問の仕方などの取材術が身につきました。もちろんプロの記者の方にはかなわないでしょうが、選手を応援できるような大学新聞らしい記事を書けるように取り組んでいます。難読な漢字や調べないと意味が分からないような四字熟語は極力避けて、誤解なく読んでいただける記事づくりを心がけています。私の記事がKAISERSの方の目に触れた時に、『頑張ろう!』と思ってもらえたらうれしいですね」。

紙媒体、WEB媒体を問わず自分の署名入りで多くの記事を発信する宮西さんにとって、思い入れの強い記事が2つある。1つはカンスポ第283号(2017年12月11日付)「宮原11か月ぶり氷上復帰」。左股関節の負傷から320日ぶりに銀盤を舞った宮原選手の復活劇を、大会当日とカンスポ発行日のタイムラグを考慮しつつ、平昌五輪出場へ光射す確かな手応えとして書き上げた。そしてもう1つは平昌五輪を現地取材した第284号(2018年4月1日付)「宮原、自分史上最高の演技」。夢舞台で自己ベストを更新し、4位入賞を果たした宮原選手の取材で、現場の雰囲気や技の出来栄を詳細に描き「少しの悔しさと大きな自信を胸に、また一日一日大切に紡いでいく。宮原知子だけのあすをつかむために。」と締めくくった。五輪後の3月8日に学内で開催された「平昌オリンピック凱旋報告会」で宮西さんは、宮原選手のインタビュアーという大役も務めた。



▲宮西さんの記事がトップを飾ったカンスポ第277号(右)、第284号

編集局員として活躍する宮西さんの原動力は高校の恩師との雑談にある。今でも脳裏に焼き付いている「『初めて』が少なくなると時間が早く過ぎる。人生を長く生きたかったら、新しいことに挑戦すること」という恩師の言葉は、第280号(2017年7月3日付)の1面コラムにも記した。「(前略)▼しかし、それでも日常に『初めて』を取り込むことはできるだろう。本を読むこと、知らないアーティストの音楽を聴くこと。カンスポの活動も同じだ。スポーツは一瞬一瞬が新しい出会い。その瞬間を伝えることこそが、カンスポ部員としての使命だと信じている▼長く、豊かな人生を生きる。だから私は、ありふれた今日に真っ白な一歩を踏み出す。【宮西美紅】」キャンパスを舞ったこの日の桜吹雪のように——。予定調和では生まれないその瞬間を、宮西さんは追い求めている。

ベルギー出身茶人が演出する「綺麗さび」の世界

忘我の時を作る茶の湯

◎茶道家
ハーブレヒツ・ティアス 宗筈 さん

Huybrechts Tyas Sosen —大学院文学研究科 2013年修了—



剣術家・宮本武蔵の生き様に触れ、日本文化に惹かれたベルギー人のティアス宗筈さん。京都の町屋を拠点に、茶の湯で訪日外国人をもてなし、厳選した有機栽培の日本茶を販売している。確たる思考と信念のもと、異国の地で、日本文化の普及活動にまい進中だ。



芸妓・舞妓があでやかに舞う京都「五花街」の一つ、宮川町。鴨川の流に寄り添うように続く石畳に面する町屋から、日本の伝統文化を発信する異邦人がいる。見る者を魅了する流麗な所作で茶をたてるベルギー人のティアス宗筈さんは、「宮本武蔵に『日本においてよ』と呼ばれて来たようなものです」と笑った。ダイヤモンド加工を中心に発展してきた故郷アントウェルペンでサムライを知った。剣道場に通い始めた16歳の時に、道場の先生から「剣道の文化を知るためにも読むべきだ」と、『宮本武蔵(吉川英治著)のオランダ語訳を渡された。「1,000ページぐらいありましたが、1カ月かけて読破しました。こんな文化があるのか。こんな信念の貫き方があるのかと、衝撃を受けましたね。当時、社会への反発や固定観念への嫌悪感を感じていたティアス宗筈さんは、「一匹狼」として孤高に生きる宮本武蔵に憧れ、日本行きを決意した。

ベルギー屈指の名門ルーヴェン大学で日本文化や言語を学び、2008年9月、交換留学生として1年間関西大学へ留学。「留学する

までの日本のイメージは、宮本武蔵の生きていた時代そのものでしたね。留学から半年程たった頃、遠州流の教室を開催していたアントニー・スティヴン・ギブス教授から誘いを受け、茶道に触れた。「それまでにも能楽、空手道、杖道、剣道などはしていましたが……。茶道を通じて日本の書、建築、庭造り、陶芸、芸術の伝統文化や古典語などを同時に学ぶことができ感動しました」。



2011年に関西大学大学院文学研究科に入学すると、本格的に日本の近世文学や伝統文化を学んだ。大学院を修了後、日本の文化とは関連のない企業に勤めたが、「何のために日本に来たのか」と自問を重ね、京都・宇治にある老舗の茶舗に転職した。茶の造詣を深め、ベルギー人初の日本茶インストラクターの資格を取得し、さらには外国人として当時最年少の遠州流茶道の師範となった。

江戸時代初期の大名茶人で、総合芸術家として名を馳せた小堀遠州を流祖とする遠州流茶道の神髄は、「綺麗さび」にある。わび・さびの精神に、美しさ、明るさ、豊かさを加え、誰からも美しいと言われる客観美、調和美を創り上げる。「茶道の精神はホスピタリティにあります。初めてお茶席に参加された外国の方から『もう終了ですか? あっという間に時間がたっていました』と言われるとうれしいですね。ティアス宗筈さんは、おもてなしの心で「綺麗さび」を演出し、忘我の時を作っている。



▲「茶ノ実鶴園」ブランドの日本茶や茶道具



▲英語版のパンフレット

現在は日本人女性と結婚し、京都を中心に活動している。「ベルギーを離れる時に『これからはずっと日本にいる気がする』と感じました。ここから日本文化を世界に広めたいですね」とほほ笑んだ。厳選した有機栽培の日本茶「茶ノ実鶴園」ブランドを立ち上げ、ワークショップに加えてティースクールも開講する。「宮本武蔵が生きた当時のライフスタイルに憧れ、昔の人が飲んでいた有機栽培のお茶をたくさんの人に飲んでもらいたいと思いました」と語るティアス宗筈さんは、母国から遠く離れた日本で居場所を見つけ、日本文化を発信し続けていく。